

カロラン作「コール夫人」 Mrs Cole

編曲、注釈：寺本圭佑

この曲はアイルランドの盲目のハープ奏者カロラン Turlough O'Carolan (1670-1738) が、ファーマナ州フローレンス・コートのジョン・コール John Cole (1680-1726) とジェーン Jane の婚礼を祝う歌として作曲しました。ジェーンを称えるアイルランド語の歌詞も残されています¹。

19 世紀の画家、民俗音楽収集家のピートリ George Petrie (1789-1866) をして「カロランの最高傑作のひとつ One of Carolan's finest airs」と言わしめた名品です。ハープ奏者の演奏を採譜していたバンティング Edward Bunting (1773-1843) によると、この曲はカロランが崇敬していたイタリア人作曲家コレッリ Arcangelo Corelli (1653-1713) の音楽を想像力豊かに模倣した例だと指摘しています。

「コール夫人」は 18 世紀のハープ奏者に好まれたレパートリーでもあり、エクリン・オカハン Echlin O'Cathain (1729-aft. 1791)、チャールズ・バーン Charles Byrne (c.1712-aft.1810)、ヒュー・ヒギンズ Hugh Higgins (c.1737-1796) らが演奏していた記録が残っています。近年ではチーフタンズのデレク・ベル Derek Bell (1935-2002) がネオ・アイリッシュ・ハープで奏でています。

<ヴァージョンについて>

現在最も一般的に知られているヴァージョンは、前述のピートリの手稿譜に記されたものです。彼は 1851 年に The Society for the Preservation and Publication of the Melodies of Ireland を設立し、同協会の会長を務めアイルランド各地の民謡収集をしていました。1902 年から 5 年にかけて作曲家スタンフォード Charles Villiers Stanford (1852-1924) が、ピートリの遺した音楽手稿譜から 1582 曲を出版しました。

1958 年に音楽学者オサリヴァン Donal Joseph O'Sullivan (1893-1973) がカロランの全集を編纂したとき、このヴァージョンを採用しました。オサリヴァンの全集は発表から 70 年以上たった現在でも多くの音楽家が参照しています。デレク・ベルやグローニャ・イエイツ Gráinne Yeats (1925-2013) もこのヴァージョンを元に編曲しています。筆者もピートリ（オサリヴァン）版で記憶しており、本書の編曲でも 1 と 3 は主にこのヴァージョンに基づいています。

オサリヴァンはそれまで多種多様な出版譜や印刷楽譜に記録されたカロランの曲をわかりやすく整理しました。彼の功績によってはじめてカロランの作品群の全体像を把握することができたのです。一方でオサリヴァンが活動していた 20 世紀中葉、カロランが演奏していた金属弦アイリッシュ・ハープの伝統は途絶えて久しかったため、彼はこの楽器に対する理解が欠如していました。たとえば、オサリヴァン版にはカロランが演奏していたダイアトニックなハープでは演奏不可能な臨時記号が書かれているものが少なくありません。したがって、実践の際には何らかの手を加える必要があるのです。

加えて、編纂の過程で彼が捨象してしまったヴァージョンへの再考察こそがオサリヴァン以降の課題だと筆者は考えています。アイルランドの伝統音楽は基本的に口頭伝承されており、ひとつの曲に対して様々に異なる「ヴァージョン違い」が存在します。それはアイルランド音楽の本質的要素であり、等

¹ [Ó Máille, 1915] p.152 アイルランド語のテキスト。1925-6 年、オサリヴァンが英語によるパラフレーズを掲載しています。なお、婚礼の年は前妻フローレンスの没後、1718 年以降からジョンの死（1726 年）までの間とされています。

閑視してはならないものです。カロランの音楽も例外ではありません。その音楽がハーブだけではなく、歌、フィドル、イリアン・パイプスなど別の楽器で伝承される過程で、伝言ゲームのように少しずつ姿かたちを変えていったのです。今回はこの点を踏まえて、「コール夫人」の編曲の際にどのような問題があったのか5つのヴァージョンの実例をあげて考察しましょう。

◇ ピートリ版（1902）

はじめに作品の全体像を知るために、現在一般的に知られているピートリ版の譜面を転載しておきましょう（譜例 1）。

Madam Cole

George Petrie/C. V. Stanford
The complete collection of Irish music
London, 1902-1905

One of Carolan's finest airs.



* トリル記号を省略

譜例 1. Petrie, Madam Cole, 1902

◇ リー版 (1778/1780)

「コール夫人」の初出はカロラン没後 40 年の 1778 年、ダブリンのジョン・リーが出版した *Favourite Collection on the so much admired old Irish tunes* です²。リーの曲集は弟のエドモンドが 1780 年に再版しています。これらリーの曲集に、“Madam Cole”, “Planksty by Carolan” というタイトルで 2 種類のヴァージョンが記録されています。前者は大譜表、後者は単旋律で書かれています。リーの曲集についてオサリヴァンは次のように批判しています。

「間違った調号、間違った小節線、間違った音符、間違った音価、間違ったフレージング、省略されたフレーズ、ありとあらゆる間違いが含まれている³」。

リー版の「コール夫人」を見て音を出してみると、オサリヴァンの書いていることがすぐに理解できます。まずは単旋律の “Planksty by Carolan” から見ていきましょう。このヴァージョンは現在よく知られているものに比べると音域が狭く 2 オクターヴの範囲にとどまっています。では、明らかにリーのミスであろうと思われる箇所を指摘しましょう。前半部分と後半部分の最後の 4 小節です（譜例 2）。



譜例 2. Lee, Planksty by Carolan, 1780

前半部分の 13 小節目のラソファレドは 29 小節目に合わせてラソミレドと弾くべきで、15 小節目 3 拍目からのレドシドも 31 小節目に合わせてレドシレと弾くべきでしょう。これは、音符の間違いの一例ですが、今回は音価の間違いとみられる部分に焦点を当ててみたいと思います。

² フラッドによるとこの曲集は、1748 年頃にカロランの息子ジョンが出版した父の曲集（現存せず）の第 4 版と言われています。オサリヴァンはこの説を否定しています。リー一族は 18 世紀後半のダブリンで楽譜出版を行っていました。サムエル Samuel Lee (d. 1776) はヴァイオリン奏者、バンド・マスターとして、クロウ・ストリート劇場で演奏会を開いていました。彼は、コークヒルに楽器店を開き、エセックス・ストリートに「サムのコーヒー・ハウス」というカフェも経営していました。1776 年に彼が死んだ後、寡婦のアンが楽譜出版の仕事を受け継ぎました。アンの 2 人息子ジョンとエドモンドも家業を継ぎ、18 世紀後半にそれぞれ別々の店で楽譜出版業を営んでいました。

³ [O'Sullivan, 1958/2001]79 収集家フォードは「このカロラン曲集には、正確に書かれたものは一曲も存在しない」と酷評しています。実際、18 世紀の印刷楽譜にはカロランの「アーサー・シェン Sir Arthur Shaen」や「ファニー・ディロン Fanny Dillon」など、奇妙な音価や不自然な小節線が書かれたカロランの作品が多数存在します。

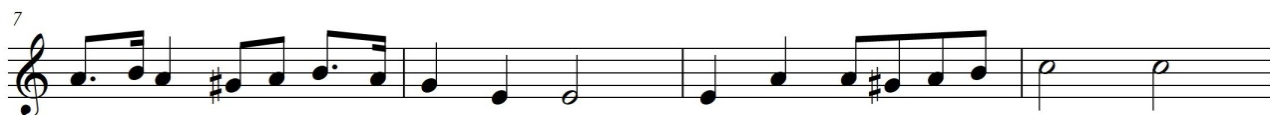
リーの曲集に収録されたもうひとつのヴァージョンである“Madam Cole”の8小節目に2拍分削られたような違和感（間違った音価）がある箇所があります（譜例3）。リー自身の“Planksty by Carolan”とピートリ版の同じ箇所と照合すると、彼自身のミスであるように見えます（譜例4, 5）。



譜例 3. Lee, Madam Cole, 1780



譜例 4. Lee, Planksty by Carolan, 1780



譜例 5. Petrie, 1902

これと同様に2拍削られたような違和感のある箇所が後半の24小節目にも存在します（譜例6）。先ほどと同じように“Planksty by Carolan”と比べてみましょう（譜例7）。旋律がかなり異なっているのでわかりづらいですが、“Madam Cole”は2拍分削られているように見えます。参考までにピートリ版の同じ箇所も掲載しておきます（譜例8）。ただし、リー版、ピートリ版以外の譜面と照合した場合、この24小節目をどう弾くべきかは慎重に考えなくてはならない問題であることがわかりました。



譜例 6. Lee, Madam Cole, 1780



譜例 7. Lee, Planksty by Carolan, 1780



譜例 8. Petrie, 1902

◇ バンティング版 (1796)

1796 年にバンティングがダブリンで出版した *A general collection of the ancient Irish music* に “Madam Cole” が記録されています。彼は優れた鍵盤楽器奏者で、ハープ奏者たちの実際の演奏を書き取ってそれをピアノ編曲していました。バンティングはこの曲をハープ奏者チャールズ・バーンから採譜したというメモ書きを残しています。彼はカロランと同時代に活躍した盲目の叔父の従者を務めており、ハープ奏者になるように仕込まれました⁴。

バンティング版の 24 小節目を確認すると、リーの曲集と同じく 2 拍分削られた譜面になっています(譜例 9)。バンティングはリーの曲集からこの部分を写したのでしょうか。あるいは情報源であるハープ奏者がこのように「前のめり」な演奏をしていたのでしょうか。

オサリヴァンは 1925 年の著作でこれについて「不十分であり、2 拍分抜け落ちている」と指摘し、ピートリ版から校訂した譜面を掲載しています(譜例 8 を参照)⁵。たしかにバンティングの出版譜には不注意な点も見受けられました。しかし、この部分は本当に彼のミスだったのでしょうか。判断はいったん保留にして別の資料に目を向けてみましょう。



譜例 9. Bunting, 1796

◇ マクリーン＝クレファン版 (1796)

「コール夫人」が記録されたもうひとつの興味深い資料があります。1816 年に書写された『マクリーン＝クレファン手稿譜』 MacLean-Clephane MS. です。この手稿譜は 18 世紀スコットランドの牧師パトリック・マクドナルド Patrick MacDonald (1729-1824) が 1784 年以前にエクリン・オカハンの演奏を採譜した譜面の写しでした(オリジナルの手稿譜は消失)。オカハンはいอร์แลนด์北部出身の盲目のハープ奏者で、当時もっともすぐれた奏者のひとりとみなされていました。彼の師はカロランの友人コーネリアス・ライオンズ Cornelius Lyons でした。この資料は 1990 年代に再発見されダブリンのトリニティ・カレッジ図書館に寄贈されたもので、オサリヴァンはその存在を知りませんでした。

ではこの資料で問題の箇所を照合してみましょう(譜例 10)。後半部分の 24 小節目を見ると、リーやバンティングとはまた一味違った違和感があります。つまり、23 小節目と 24 小節目の間が 1 小節目まるごと抜け落ちているように書かれているのです。実際、他の版は 32 小節目で終わるのに、マクリーン＝クレファン版は 31 小節目までしかありません。



譜例 10. MacLean-Clephane MS, 1816

⁴1840 年の出版譜ではヒュー・ヒギンズから得たとも記しています。

⁵ [O'Sullivan, 1925-6/1967]pp. 54-56 チャールズの叔父はカロランの作品を盗んでいたという逸話があり、カロランは彼をひどく嫌っていたといひます。

◇ まとめ

これら「コール夫人」の後半部分に見られる奇妙な個所は編者の単純なミスなのでしょうか。リー版とバンティング版だけ参照していればその可能性も考え得るでしょう。ただ、これに加えてオカハンの演奏を採譜したマククリーン＝クレファン版を参照すると、また別の見方ができるのではないのでしょうか。

どうも 18 世紀のハープ奏者たちは「コール夫人」の後半部分、24 小節あたりを曖昧かつ自由に演奏していたように思われてなりません。これを単純な記譜の間違いとして打ち捨ててしまわず、アイルランド伝統音楽の多様性や豊潤さを示す「ヴァージョン違い」のひとつとみなせば、ポジティブに編曲に採り入れることができるのではないのでしょうか。バンティングの 24 小節目などは、実際に何度も繰り返し弾いていると、前のめりな旋律に一種の躍動感すら覚えます。あるいは俳句の字足らずのような趣もしみじみと感じられてきます。今回はこれらの点を踏まえて、なるべくヴァージョン違いを活かした編曲を行いました。

<臨時記号>

臨時記号はすべて省略しています。バンティングの譜面を見ると主旋律には臨時記号は一度も現れないので、おそらくそのように演奏されていたのだらうと推測できます⁶。奇妙なのは、オカハンの演奏を採譜した資料の筆写譜である『マククリーン＝クレファン手稿譜』に臨時記号が現れていて、どのように弾いていたのかが疑問に残ります。オクターヴごとに違う調弦を行っていたのか、そもそも臨時記号は弾いていなかった可能性もあります⁷。この譜面を書写したマククリーン＝クレファン姉妹はペダルハープを演奏していたので、自分で演奏するために臨時記号を書き加えてしまったのかもしれません。

<収録内容>

本書は筆者が制作している 19 弦あるいは 20 弦の金属弦ハープのために編曲したカロランの「コール夫人」です。計 4 種の譜面を用意しています。

1 と 2 は調号なしの A マイナーの譜面。G3-D6 の 19 弦のハープで弾くことを想定していますが、もちろん 20 弦でも弾けます。3 と 4 は#がひとつ付いた E マイナーの譜面。20 弦のハープ (G3-E6) のための編曲です。3 はオカハンのヴァージョンを一部に採り入れて、後半部分は 31 小節で終わっています。1 と 3 はこれまで論じてきた譜面を踏まえて、あえて少しずつ違う旋律を書きました。リピートの際に変化をつけるなど、ご自身のヴァージョンを作られるのも一興でしょう。空五線譜を用意しましたので役立てていただければ幸いです。

序文で論じた 5 種類の「コール夫人」の単旋律譜も収録していますので、アレンジの参考にしてください。これをご覧いただくと、筆者によるアレンジ部分がわかると思います。

1. 寺本圭佑編曲「コール夫人 1」A マイナー、19/20 弦ハープ用
2. 寺本圭佑編曲「コール夫人 2」A マイナー、19/20 弦ハープ用、指番号、ダンピング記号付き
3. 寺本圭佑編曲「コール夫人 3」E マイナー、20 弦ハープ用
4. 寺本圭佑編曲「コール夫人 4」E マイナー、20 弦ハープ用、指番号、ダンピング記号付き

⁶ デレク・ベル [The Chieftains, 1993] やグローニャ・イエイツも臨時記号を省略しています。ただし、The Chieftains 10 では臨時記号をつけて演奏しています。

⁷ C4 の音はあらかじめ半音上げておくことによってダイアトニックのアイリッシュ・ハープでも演奏可能です。

参考資料

- Bolger, Mercedes & Yeats, Gráinne. (1998). *Sounding Harps Music for the Irish Harp Book Four*. Dublin: Cáirde na Cruite.
- Bunting, Edward. (1796/R2002). *General Collection of the Ancient Irish Music*. Dublin: Walton Publishing.
- The Chieftains, (1981) *The Chieftains 10: Cotton-Eyed Joe*, Claddagh Records.
- The Chieftains, (1993) *The Celtic Harp, A tribute to Edward Bunting*. New York: BMG Music.
- Fleischmann, Aloys. (1998). *Sources of Irish Traditional Music c. 1600-1855*. New York: Garland.
- Lee, Edmund. (1780). *A Collection of Irish Airs by the Celebrated Composers Carolan and Conolan*. Dublin.
- Maclean-Clephane, Ann-Jane. (c.1816). *Maclean-Clephane Manuscript*.
- Petrie, George & Stanford, Charles Villiers (ed.) (1903/1994). *The Complete Collection of Irish Music from the original manuscript*. Felinfach, Wales: Lanerch Publishers,.
- Ó Máille, Tomás. (1915 /1988). *Amráin Cearblláin The Poems of Carolan*. London, UK: The Irish Texts Society.
- O' Sullivan, Donal. (1925-6 /1967). *Journal of the Irish Folk Song Society volume 5 The Bunting Collection, 1796*. London: Wm. Dawson & Sons, Ltd.
- O'Sullivan, Donal. (1958/2001). *Carolan: The Life Times and Music of an Irish Harper*. Cork: Ossian.
- 寺本圭佑『18 世紀アイルランドにおけるハープ音楽 ―その興亡の資料的検証―』（2010 年、明治学院大学大学院博士論文）

編者の紹介

寺本圭佑（てらもとけいすけ）

京都市出身、横浜市在住。15 歳から雨田光示氏にハープを師事。坂上真清氏からネオ・アイリッシュ・ハープを学ぶ。アイルランドやスコットランドでシボーン・アームストロング、アン・ヘイマン、ビル・テイラー各氏から金属弦ハープの手ほどきを受ける。音楽学を樋口隆一氏に師事し、資料研究の方面からもアイリッシュ・ハープの歴史と真実を追求。18 世紀以前のアイリッシュ・ハープの研究により芸術学博士（明治学院大学大学院）。19 世紀末に伝統の途絶えた「金属弦アイリッシュ・ハープ」を専門とし、この楽器の魅力を伝えるため、全国で演奏やレクチャーコンサート、ワークショップを展開。2020 年 7 月現在 214 台の金属弦ハープを制作し、普及活動に役立てている。2017 年、BS-TBS「こころふれあい紀行～音と匠の旅～」にアイリッシュ・ハープ研究家として出演。ケルトの音色を現代によみがえらせる活動を集める。『ケルト文化事典』（東京堂出版）の「ハープ」「オカロラン」等の項目を担当。

<https://teramotokeisuke.com/>